経済地理

経済地理学は，物理的な「空間」を中核的な理論契機に据え，均質な空間が経済･社会に包摂される過程で不均質な空間編成と建造環境が生産されるメカニズムを解明する。産業立地と国際分業，都市空間，運輸･通信による空間統合，グローバリズムとローカリティなどは，いずれもこの不均等な空間編成の具体的形態であって，建造環境として土地に合体される。経済地理学の空間理論に拠って立つことで，これら今日的諸課題に，斬新な研究の座標軸が与えられる。

均質な空間から不均質な空間が生産される過程を解明する法則定立の科学として経済地理学を定義するアプローチは，すでにチューネン以来 1 世紀以上の伝統が欧米にあり，これを現代の経済･社会の諸問題の批判的分析に用いる研究アプローチは，1970 年代後半から英米の地理学界において急速に広がってきた。本学の経済地理部門はいち早くこうした研究動向をとらえ，ICGG や EARCAG など海外の研究グループとの連携を図りつつ，日本の地理学界に新しい海外の研究動向を吹き込むに当たり先導的な役割を果たしている。

本学の経済地理学には，創立以来の歴史がある。1886 年，東京商業学校に世界各地の物産等の情報を教える「商業地理学」が置かれ，1930 年には日本で最も早く「経済地理学」講座が設けられた。その後，ウェーバーの工業立地論など空間経済に関わる理論的研究と，社会科学としての地理学という認識とに裏付けられ，本講座は，社会学部に設けられた「社会地理学」と共に，「一橋の地理学」という独自の在野的伝統を学界の中でかたちづくってきた。他大学にある地理学科のような固定的研究制度と異なり，地理学者が，社会科学における多数の分野の研究者が集う学内のオープンかつロバストな学問環境にもまれ，社会科学の理論を背景にもちつつ，社会科学の一分野としての地理学を確立することにチャレンジし続けてきたところに，本学の経済地理部門の大きな特色を見出すことができる。

共同研究室は，東本館 2 階に設けられている。